

本書は、豊かな社会に蔓延する無気力という現象を、「獲得された無力感」や「効力感」という概念を用いて、心理学の立場から明らかにしようとしている。再来年度から小学校で全面实施される新学習指導要領では「学びに向かう力、人間性等」が、資質・能力の三つの柱に位置付けられている。また、国際標準の学力であるキー・コンピテンシーでも、「自律的に活動する」がカテゴリーの一つに位置付けられている。昨今の教育における世界的な潮流として、今まで目に見えない学力と捉えられてきた情意や態度面についても、しっかりと育成することが求められているといえる。

本稿では第 1-3 章について、次の 3 つの観点から考察を加える。つ目に効力感と意欲について、2 つ目に粘り強さについて、3 つ目に努力万能主義についてである。

1 つ目の効力感と意欲についてである。著者は乳児の泣き声に対する母親の反応を例に挙げ、より早く母親が反応した方が、乳児の効力感の獲得に良い影響を与えることを示している。「自分は環境に好ましい変化を及ぼすことができる」という一般化された期待を乳児が形成することによって、自信や意欲的な態度などの効力感を獲得する。奈須(2002)も、「人は、自分の行動がまわりになんらかの変化をもたらすと思っているからこそ、何かを為そうとする」という。行動に伴う結果が期待される環境が整うことで、人は効力感と同時に意欲を高めるのである。第 1-3 章では学校教育において効力感や意欲をどのように高めていくのかについては言及されていない。具体的な手立てとして、相互交流によって友達から正の評価が得られるような場面設定を、意図的に設けることを提案したい。

2 つ目の原因帰属についてである。テスト結果の原因を「能力」に帰属する群と「努力」に帰属する群を比較し、学習者の意欲や行動の違いを明らかにしようとした実験事例が紹介されている。「能力」に帰属する群は、課題に対して投げやりな態度をとるなどの特徴がみられたという。そのような態度をとる子どもに努力することの意義を教える方法として、著者は「得意分野を見つけさせること」「具体的改善策を思いつかせること」という 2 点を提案している。上記の 2 点は、子どもが一人で考えて実践できるものではない。そのため、子どもに様々な経験を積ませることを通して、教師と子どもが共になって見出していく必要がある。「〇〇さんは、～が得意なのだね。」「～をさらに良くするために、できることは何かな？」など、子どもに省察を促し努力することの意義に気付かせるような声掛けや問いかけを、教師が試みてはどうだろうか。

3 つ目の努力万能主義についてである。著者は子どもの失敗の全てが、個人の努力不足に帰属されてしまうことに対して警鐘を鳴らしている。努力万能主義を突き詰めると、能力不足に原因帰属せざるをえず、子どもが手ひどい無力感を味わいかねない。その結果、無気感が学習されてしまうのである。教師は子どもの可能性を信じようとするあまり、努力万能主義の指導に陥ることがある。児童が努力で乗り越えられそうであるか否かを冷静に見極めた上で支援を行うためにも、教師は日頃から児童理解や関係構築に努める必要がある。

以上、3 つの観点から第 1-3 章について考察した。無力感が獲得されると、社会に無気力が蔓延する。「子どもや社会が変わったから」と、その原因を自分の外に求める教師もいるだろう。しかし、人を相手に仕事をしている我々教師こそ、どのような時に子どもが無気感を獲得するか、効力感や意欲を高めるかを把握し、確かなエビデンスや理論に基づく指導を行う必要がある。子どもがどのように学ぶかのメカニズムを明らかにし、「学びに向かう力、人間性等」や「自律的に活動する」などの、情意や態度面の資質・能力を向上させられるような指導の在り方を検討していきたい。